光

第五十六輯

大正十五年八月

◆一燈園生活について（一）……西田天香

◆神と偕に生くるこゝろ……谷口雅春

◆兩手……荻原井泉水

同人懺悔報恩の奉仕者
祈願不二の光明によれる生活
費用供養されたる浄財

◆路頭にて……すゞき五ろう

◆スラムポストのいのり……松下吉衞

◆神の國は近い……エックハルト

◆天香詣師の西遊を送る……中桐確太郎

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戯三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の盡し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

一燈園生活について（一）

西田天香

一、總　説

昔から盆とか正月とかいふ事がつたへられて來ましたが、どうゆう事から一年中の基えをなすのかわかりませんが、正月の歳の新たまる氣持はまた格別、また盆とて今頃になると、かうして集りなぞすることが、なんとなくしつくりと落ちつくやうです。新と舊と一ヶ月許り前後はしますが、七月から八月へかけて、盆の供養をする氣持は、大方、人類が生存してゐる間、いつまで經ても變りのない、これは、人の定めた事なれど、永い歴史に滅びない、自然の約束があるのでせう。今年で何回目かになるこの集りを、今年は私が布哇へ行く爲に一ヶ月繰り上げて今夜から一週間集る事になつてゐます。

盆は習慣的に、前の佛様達を供養する、宗旨によつて、いろ〳〵と形式はちがひますが、大體に於て、過去の代々の有縁無縁の佛を祭るので、一燈園では極めて簡單にお祭りをする事になつてゐます。一燈園にも因縁の佛は隨分たくさん有ります。

先つきから經を誦みながら、頭に浮んだことですが、供養とは、必ずしも形式を重んじない。かつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

て禪の寺へ行き、老師の高坐を開きし時、色々の話につけ加へて、在家の行ふべき道を、懇切をきはめて敎へられたが、ほんとに感じる程の氣持は出ず、何か足りないものがあるやうに思ひました。それは、在家の問題を整理するに、も少し力の足りない恨みがあるやうで、頭が下らなかつた事でした。しかし一緒に聲を揃へて經を讀む時は、流石に、純粹である、老師が佛前に進み香を炷き、右の方から元の坐にかへり坐具を布いて跪き、頭を低く下げて兩手で三千大千世界を押しいたゞくやうになさる時、老師自身にも、それにおろかな氣持はないが、一生懸命敬虔の念で、一切諸佛を拜む、嚴な光景である。昔の祖師方が、佛に供養するお經の先に、此一辨香をたれ〳〵に捧げると云ふて、香を拈じては禮拜し、一辨香、一辨香と次第々々に捧げられる事を記憶する、かくて火の中へ香を燃す時、一番淸淨な氣持が出る。そこにある花、果物、茶湯なぞ列べたものは物である、炷く香も物ではあるが、炷く時の氣持は、第一淸淨心である、ほんとの無我である時、ひと捻りの香が佛に對してもつともよき捧げもので、佛もまた、嘉納せられる事なのであります。

一燈園生活始まつて、二十四年、建物出來て十四五年にもなれば、此生活で死なれた人もある、ながらくこゝにゐて、國に歸つて死なれた人もある、また托鉢先きで死なれた人なぞもある。一燈園同人の各々先祖代々靈位などを加へて、日日どれだけの佛達を拜んでゐるかも知れぬ、經は御承知の通りまづ般若心經と維摩經といふてよい位である。この多くの人が正式に衣一つ着けず、念珠も持たず、着のみ着のまゝの仕事着の身なりでお勤をしてゐるが、隨分淸淨な心持で誦んでいただけるのでかへつて誠は通るとおもひます。東海道の或る寺の和尙さんが、園に托鉢に來て私に、昨夜こそ始め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

て經を誦んだと申されます。あなたは眞言宗の御僧侶とうかゞうた樣に思ひますが、と申しますと、實は今迄毎日よんでゐたお經は商品であつたのです。托鉢から歸つて、お經を讀んだ時、ほんとにお經の有難さがわかりましたと申された。先きのお經を、商品とはあまりに皮肉のやうですか、しかたのない實感であつたのです。

毎日やつてゐる事で自然のまゝであるので別段氣もつかぬ位ですが、托鉢先から御苦勞樣といはれて歸ります。歸つても唯當番さんが『お歸り』歸つた人は『只今』といふだけで、どれ程暑くても一杯の氷水もなく、慰むる何物もない、それにかように慇懃に坐つて一しよに心經と維摩經を唱へる。きつと佛方はよろこんで、これをお受けなさると私は信じます。

此生活では一番有難いのは、さつきにいふた一辨香のかわりに、『今日一日の清淨な無相の働き』といふ事に結論せられる、一燈園はそこに中心がある。たく香はなし、むづかしい作法はしらず、たゞ朝起きると、兎にも角にも一日喜んで働かせて貰う、それが何よりの供養となるのである。一燈園の盆供養はこんな事で、因緣の佛方、先祖代々の靈達を慰め、おまつりをするのであります。

時々一燈園生活は、親不孝のやうにいはれる、法事はしないし、ことによると、親の死に目にも行く事の出來ない場合もある、親不孝といわれても一寸仕方がないようにきこえるが、實はこれほどの孝行はないとも云ひ得るのである。私もかつて世間並の法事もせず、みなさんもそうである。然し見方によれば一番よい徹底した法事をしてゐるのです。承りますと、私が滿洲へ行つた永の留守中もみなさんまじめに、托鉢して下すつたとの事。その氣持で佛の盆供養をしたい、殊に遠方からお客樣も

見え、また私は最近に遠方へ行く。出來るだけみなさんとこの機會に語りあひたいと思ひます。先づ今日は概括的に、總論として、最近の私の身邊を中心とした感じを申上げることにいたします。

或る人が一燈園はこれから、何年位その生活を續け得ようか、もう下火だらう、などと評せられ、又會員は幾人あるかなぞ、奇問をされる時に私の思ふには、外面許りを見る批評は、＝ふくれたり、ちぢんだりする、此種の批評は　＝私共の仕事に、何のかゝわりもないことであります。それよりか『今こんな問題にぶつかつてゐます。どうしたらよろしいか。』といふやうな相談の時、實際問題である。批評は、實際とは沒交渉である。たとへば親が一人の娘のゆきつまつた問題を持つて來るといふやうな時、實際の深刻さに當面するが、こんな事で一燈園はます〱忙しくなる、亦皆さんもそうであらう。毎日變つた處へ托鉢する、それらの家の問題、また友人や身內の問題、こうした事に逢ふと解決を頼まれる事もあらう、どうしても、問題の究極は、一燈園の生活まで來ねば整理がむづかしいといふ事になる。

朝鮮の京城で、大官の人から聞いた中に、朝鮮の民衆の問題があり、そうしてそれは主に農民の事であつた。現在農民が、亡びつゝある氣の毒な狀態、觀ようでは、農民自身も振ひ立たねばならぬこともある、地主が惡いか爲政者が惡いか、とにもかくにも行き詰つた事は事實である。洋行された人で諸國の事情を見て來られたが、デンマルクの農業狀態を調べた報告に、デンマルクは、かつて大變な瘦地であつた。最近はそれが開墾され、有利な農作物が出來るやうになつてゐる、デンマルクの農民が、精神的に、喜んで仕事をする、その思想を調べると、近代式の教育でなく、農村にかくれた、

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一つの人格者が、目立たぬ程の小さい仕事を、コツ〳〵してゐた事が感化して延びこゝに至つたのであつた。ケバ〳〵しいハイカラでない、地味な、眞面目に働くその自分の生活から教育したので、それが鼠算的に延びて發達した、と。これを聞いてゐた或る人が、それは丁度一燈園生活ではないかと云ふのです。私は自身に、それかどうか、わかりませんが狙つてゐるのは、そこである、又一燈園の生活に、それがあると信ずる。みなさんの托鉢の中に、それが輝いてゐる。

朝鮮で一年二ケ月許り朝鮮の人と共に働いてゐる園の同人がある。そこでは模範とされてゐる。たつた一人で托鉢してゐるが、作つた波紋は大きい。

又金州の或る寄宿舍で、學校の仕事をしながら、子供の世話も頼まれてゐる同人がある。大連の人の云はれるに、宅の子供を金州までやつて、あの同人の方に面倒を見て貰ひたいといふ樣な話しもある。寄宿舍がどれ丈、精神的に整頓してゐるか、校長や視學から私に禮を云はれました。只忠實に働いてゐる丈である。金州驛から城内へ行くのに、支那人の馬車屋が、その同人に馬車にお乘りなさいと云ひます。同人は『私はお金を持ちませぬ。』馬車屋は、『知つてゐる。かまひません お乘り下さい。』同人は、『なぜ乘れと云ふのですか』支那人曰く『あなたの仕事は無報酬だ。』といふのです。こうして、チヨイ〳〵ただで乘せて貰はれます。ただで乘れるのは岩間先生といふ張作霖の顧問をしてゐる人と、此二人だそうです。

金州から三里許り隔つた愛川村で、農業をしてゐる同人がある。水が少なくなつた時、手傳ひに來てくれる苦力さんに、水をよその田へ採つて餘りがあつたら、こちらへもらうて下さい、と云ふと、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

苦力さんはホロリとして『そうするのですか』と云ひました。その同人が愛川村を引揚げると云ふとその苦力さんが、生涯、あなたの傍に置いてほしいと云ふ。こんな事を數へると、下の方のしごとの中に、祈りを含ませた人格的の働きが、敎育となり、根底となつて、精神的に固め得るのであります。賢い人に依つて出來るのでもない、技術によつて出來るのでもない、制度を替へてもどうしても整はぬ。根本に、裸からやり出し瘦地を肥し世の中に物を殖し得る人が必要なのです。

前に述べた洋行した人が、デンマルクを理想して、その實現上、一燈園の生活の必要を感じるのは、一時の感激や、はやりでなく、行詰つたからである、園の生活がまたこれほどの力がなければ、人が引張つてはゆかぬ、たつた一人の同人の周圍に大勢の人の集るのは、どこかに自身の生活では滿たされぬ淋しさがある爲でせう。勝ちほこつたやうな目からは、つまらぬ事のやうにも見えるが、大磐石の上に立ち、頭は青空に突込でゐる。みすぼらしい表面に似ず力强いのは、求めないからである。その內容はやさしい慈と悲である、この氣持を生活に織りこめてゐるのである。

時々刻々に、かうして世間の惱みから此生活が要求される、いよ〳〵此生活でもつて割り切り、透徹する事を心掛けねばならぬ事を自覺する。

私は近く布哇へ行き、それから加州迄行くかもしれぬのですが、加州の狀態から或る人が、あそこは實に一燈園生活が必要であると云ひます。日本人が政治的に土地の所有を禁ぜられ、經濟的にまことに不利に陷つてゐる。然し娘や息は變らず派手な生活である、敎會や寺院が、その問題を整理するに、不徹底であるのは、寺も敎會も、同じく物質を必要とするやり方であるからである。一燈園の筆

法なれば何でもない。働いて取らぬ、排斥されるそうばでない、なければならぬ必要事であると、云はれます。

内面的に複雑になる許りの世相、私がなくなつた後、皆さん隨分繁忙になる事です、一寸でもやり損ふてはならぬ、組織的な世界の思潮に、一寸した透徹を欠くと、メチャ〳〵に打ちのめされる。財産も、骨董品も何にもいらぬと云ひながら煙草代だけちよつとほしい、それでは、メチャ〳〵になる、命も入らぬ、天國へ還るのだ、女房は神任せ、自分は根限り善い事をして求めない、といふので、すべては切れて了ふのである。

價に換へるなら何程になるとも知れぬ、托鉢の眞價を、僅なものに換へて了ふ。そこをはつきり、身を渡し切つて、貪らず、練り上げて、此深さを示して置いたら人類の惱みに、最も大きな奉仕となるのである。ほんとの物を見やうとせず、次の物に目を付けると大變である、昔からその爲に此生活が消えて仕舞つていたのである。

一燈園の一番大切な事は、求めない、死に切る、出來るだけ自分の事でなく捧げる事である。勿論一燈園許りでなく宣光社も共に世間から求められてゐる。園の古い方々の中に一燈園と宣光社との扱ひ方に付いてしきりに研究してゐられる。私もまだ斯くの如くと、一つ一つ手本を書いてはいぬが見方では大體まとまつてゐる、此一週間も皆さんと共にいろ〳〵尙調べたい。遠慮なく疑問を聞かしていたゞきたいと思ひます。

大正十五年八月十八日夜、一燈園に於ける天香師講話筆記

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

神と偕に生くること

倉田氏の『善惡を横に截る道』及び伊藤氏のその駁論を讀みて

谷口雅春

かんながらに生きると云ふこと、さては天理教祖の『むねのうちすみきりましたがありがたい』の境地における生活、倉田氏の所謂る『自由意志を神に返し神意に至順に生きる』生活、これらは自分にとつては畢竟ずるに同じところを目指したものだと思はれる。自分は言葉に無理にこだはらない以上此れらの生活をもつて、道をもとむるものゝ志すべき生活だと考へて差支へないと思ふ。

之に對して或は云ひ得るであらう。神は一切を包攝してゐるから吾等は神の外には一歩も出ることは出來ない、それ故吾等は如何にするも惟神の生活を送らざるを得ない、特に惟神に生きようと分別するが如きは惟神ならざる生活、神に逆うたる生活の存在をみとむることである。二元の宇宙をみとむることである。『抑々被造物たる人間が神意に逆らひ得ると云ふ事は、何處から考へ得べきであるか。』(1)また大我は小我を完全に包容してゐるが故に、小我は大我のそとに出づることは到底出來ない。それ故小我を生きると云ふことはそのまゝで大我を生きると云ふことである。また宇宙の本質は

すみきりである。このすみきりを如何なる吾等の行爲も濁すことは出來ない。それ故吾等は濁つた行爲をなしながらもそのまゝですみきりであるのである。更にまた『我々に自由意志のあるのは我々に眼があり、耳があり、生の慾望があり、性の慾望があるのと同じことだ、雲が動かずに居られず、岩が蹲らずに居られないのと同樣に、我々は自由に意志せずに居られないのである。我々の自由意志は決して勝手に神に返すなどと云ふ事の出來るものでは無い、又決してさう云ふことをする必要は無いのである。雲の動くこと、岩の蹲ることが、其儘神需であるならば、我々が自由意志の選ぶがまゝに、自在に云爲行動すること、是亦其儘神需で無くて何であらう。』(1)

(1)『生活者』第四號所載伊藤證信氏の論文『相對善の世界と絕對善の世界』中の言葉をそのまゝ借りる。

玆に道を求むるものにとつての最も深遠幽邃なるところの問題があるのである。自分も一緖に此の問題を考へさして頂きたいと思ふ。

自分は倉田氏の論文『善惡を橫に截る道』を讀んで大體その論文の運ばうとしてゐる內容に共鳴したのである。共鳴したと云ふよりも自分自身その論文を讀む以前に於てその論文の運ばうとしてゐる內容と略々同樣の考へに逢着してゐたのである。(『光』誌所載拙稿『無相の行者の境地に就て』『無相無縛の境涯へ』等參照)唯、自分が倉田氏のあの論文を讀んだとき、一寸理會しがたい感じに打たれたのは『自由意志を神に返す』と云ふ言葉と、『善惡を橫に截る道とは言ひ得べくば、責任を神に歸する道である。我々は已に我々の自由意志を神に返した。我々は神意によつて一つの行爲をなした。故にその行爲は我々に責任はない。從つて我々は安心することが出來る』と云ふ言葉であつた。併し前者については『自

由意志を神に返す』とはキリストがゲツセマネの園に於て『この杯をわれより取り去り給へ。されど我が意を行はんとするにあらず。み旨のまゝなり。』と云つて祈りを捧げられた光景がすぐ其の時自分には聯想されたのである。『此の杯をわれより取り去り給へ』はキリストの自由意志である。そして『我が意を行はんとするにあらず。み旨のまゝなり。』との第二の言葉はひとたびは高くかゝげたる自己の自由意志を、主の大いなるみ旨の前に跪かせたのである。かゝる意味に解したる自分は『自由意志を神に返す』と云ふ言葉について自分が最初にいだいた疑問がその當時はあとかたもなく消えて了つたのであつた。

されど今つら〳〵考ふるに『自己意志を神に返す』と云ふ言葉には幾分の語弊がある。それは倉田氏が云はうとしてゐられる内容にぴつたりしてゐないのでなからうか。それはふさはしくない言葉、所を得ない言葉ではなからうか。キリストがゲツセマネの祈りに於て『この杯をわれよりとり去り給へ』と云ひ給ひしは自由意志の表現であるのは無論であるが、第二の『されどわが意を行はんとするにあらず、み旨のまゝなり』の言葉さへも自由意志の表現なのである。人間にありては、我意を行ふも、我意を放棄するも共に自由意志の選擇であるのである。『我々の自由意志は決して勝手に神に返すなどと云ふ事の出來るものではない。』と云ふ伊藤氏の駁論がうまれたのも尤もである。

多くの人たちは言葉を思考の道具として思考する。そしてその用語が所を得ないときには、用語が惹起す聯想作用にひきづられて全然反對の結論にさへも到達しがちなものである。例へば『運命』と云ふ言葉である。この言葉は一方では『良からぬ業因のめぐり』を聯想せしむる。かゝる場合、吾等は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

運命に從順であることは自己を惡業の虜とすることであるから、かゝる運命のめぐりの束縛から脫するために吾等は逆に業因斷滅の方法に精進すべきであらう。また此の言葉は所謂『運命の神』を聯想せしむる、すなはちそれは神の測り知られぬ聖意を聯想せしむる。かゝる場合には、み旨に從ふと云ふ意味に於て吾等は『運命に從順』など云ふことこそ却つてのぞましいであらう。（拙者『信仰革命』有島事件批評の項參照） 即ち言葉が所を得ないときには、互ひに全然反對なる結論に落ちて行つてそれで全然論理的に正しいやうな心持になるものである。

飜つて倉田氏の『自由意志を神に返す』と云ふ言葉を考ふるに、倉田氏自身は『自由意志を神の大いさにまで一致せしむる』ことを意味せしめながら此の言葉を使はれたのではなからうか。此處に言葉が行つた手品の種があるのである。それは自由意志の返上でも放棄でもない、それは却つて自由意志の擴大であり、伸張であり、一層大なる成長を意味するのであらう。惟神に生きると云ふことは、人間としての生活を捨てると云ふことでなくして人間としての生活を神の大いさにまで一致せしめて、神の如き自由にまで達せしむると云ふことである。小我を捨てゝ大我に生きると云ふことも、實は小我を捨てるのではなく、これを擴大し成長せしめて大我にまで一致せしめ、もつて一層自在無礙なる大自由意志を獲得すると云ふことである。吾等は『小我を捨てる』と云ふ言葉の手品にまごはされて、豫期もしないところの結論にひきづられて往つてはならないのである。自分が第二に疑問に思つた『我々は已でに我々の自由意志を神に返した。我々は神意によつて一つの行爲をなした。故にその行爲は我々に責任はない、從つて我々は安心することが出來る』と云ふ倉田氏の言葉は、倉田氏自身

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

の本來の結論（多くの本當の結論は直覺的に來るものでこれこそ本來の――論理を經ずして直接に摑まれた――結論であつて、論理を遣る際言葉の手品の行つた結論とは區別さるべきものである）ではなからうと思はれるのである。かう解して來るとき、この行爲の責任回避論は倉田氏自身の結論であると云ふよりも言葉の手品氏の結論であるかのやうに自分には解せられるのである。自由意志は返上した――自由意志のない所に責任はない――かるが故にかゝる行爲は我々には責任はないと。如何にも言葉のトリックらしいではあるまいか。

抑々神より與へられたものは出來るだけ肯定するのが本道である。我々は生命を與へられた、それゆゑ吾々は生命を出來るだけ肯定しなければならない。吾々はより深くより廣くより豐富に生きなければならない。吾々は神より ego を與へられた。それ故吾等は出來るだけ ego を肯定しなければならない――これを深く廣く豐かに達し得るかぎり成長せしめねばならない。我等は自由意志を與へられた。それ故吾等は出來るだけ深く廣く強く豐かに自由意志を肯定しなければならない。唯玆にも注意しなければならないのは、吾等は言葉の手品に誤魔化されて到達すべき結論を誤つてはならないと云ふことである。耶蘇は眩しく輝く言葉をパラドキシカルに吾々に投げかけて云ふ。『生命を得んとするものは生命を失ひ、生命を捨つる者は生命を與へられん』と。吾等は言葉で議論してはならない。此の不可思議なる輝く警句は生命それ自身でその眞意義を體得しなければならないのである。

生命の本質は ego である、ego の本質は選擇である、選擇の本質は自由意志である。併しながら自由意志を捨てると云ふこと、又は自由意志を返上すると云ふことも又別なる選擇を選ぶと云ふことで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

ある。選擇の本質は自由意志である。自由意志は捨てゝも捨てゝもあとから出て來る。それはたとへば薤の皮を剝くやうなものである。剝いても剝いても剝き切れないのが吾等に與へられたる自由意志であるのである。

『自由意志を返上する』と云ふ倉田氏の言葉が、自由意志を全然有たぬところの石ころ化することをのぞまれたのでないことは、氏の論文に所々にきらめいてゐるのである。倉田氏はあの論文に於て孔子の所謂る『心の欲する所を行つてその矩を超えざる』境地を思慕してゐられる。また『我々が自由意志を持ち乍ら、神需の儘に一元的にひたすらに行ひ得ること、あだかも水が流れ、雲が行くが如くであることを欲する』(『生活者』第一號六〇頁)とも云つてゐられる。こゝでは自由意志は決して捨てられてはゐないのである。依然として『自由意志を持ち乍ら』自己の行爲が一元的に所を得るやうになるここそ氏の願ひであるのであらう。それは『自由意志の返上』ではなくて『自由意志の淨化』と云ふ方が好いであらう。

玆に云つておきたいのは、吾等は言葉の手品で議論してはならないと共に、觀念の上でわざとらしい峻しい對立をつくつて、斯くの如き場合には如何にするかと悲愴な氣持になつてみづから樂しむが如きは排斥しなければならないと云ふことである。伊藤氏が『たとへば、母の病氣の看護をしたいといふ切なる慾求と、母の病氣の看護さへも擱いて、公務に奉じたいといふ切な慾求とが、同時に自然に我心に起り來つた時、何れの欲求に隨ふを以て神の心に至順なものとすべきであるか……其他之に類した互ひに相矛盾した二つ以上の慾求又は義務心が、何等の無理もなく、各々神の命令の如き至純

さをもつて、又は各々自己の私慾の如き執拗さをもつて、同時に我々の心の中に起り來り、神意に至順ならんとして我々をして常に其去就に迷はしむる事はないであらうか』と云はれたる疑問の如きは幾分、さうしたわざとらしい峻しい對立を觀念の上でつくつて自ら樂しまれると云ふ風な傾向があるやうに思へて遺憾である。倉田氏の論文が『自由意志を返上する』と云ふ言葉の手品に幾分引ずられ加減な所があるやうなのは遺憾であるが、倉田氏の神祕主義の實踐倫理はあの論文全體を通じて實に明瞭に出てゐると思ふのである。倉田氏の思慕せらるゝ境地はかくの如き矛盾や峻しい對立の生ぜざる境地であるのではなからうか。『一元的にひたすらに行ひ得ること、あだかも水が流れ、雲が行くが如くである事を欲する。』と倉田氏は云つてゐられる。一元的にひたすらに行ひ得る境地に立つたとき我等は伊藤氏の云はるゝやうな矛盾と峻しい對立に苦しめられると云ふことは斷じてないのである。吾等は飯を頬張りながら野球を熱心にスポーツすることは出來るであらうか。野球に熱中するとき我らは食慾は起らない。食事に熱中するとき野球を遊ぶことは出來ない。吾等は白熱的に性交するとき、何の一切の慾望は起り得ない。吾等の生命は一元的であり、吾等の宇宙は一元である。吾等の生命は統一體であり、吾等の宇宙は統一體である。それ故吾等の自由意志が浄化するとき（すなはち伊藤氏に云はせれば『神を知り自由を得て、眞に天性の儘に振舞ふことが出來たならば』）吾等の自由意志は、此れかあれかの峻しい對立にくるしめられることなくして『たゞにあり、たゞに行ふ』自在境に到達するのである。

さてこの眞に天性の儘に振舞ふことが出來て、しかも矩を超えざる大自在境、大調和境に達するに

は如何にすべきかの問題が最後にのこるのである。倉田氏は『神に至順になることによつて』と云はれる。伊藤氏は『神を本當に知ること、神に本當に觸れることによつて』と云はれる。兎もかく兩氏の說はそれほどに背反はしてゐないのである。神は物を認識の對象とするために發達したところの吾々の普通の理性によつては知ることは出來ない。『心の淸きものは幸ひなり、彼は神を見ることを得べければなり』と耶蘇の云ひたまひしやうに吾等が神を知るには先づ心が淸くならなければならないのである。併し『心が淸い』とは如何なることであらうか。それは如何なる惡念の微塵をも思ひ浮べないやうな淨無垢の心境に對することであらうか。若しさうならば吾等は永遠に神を知ることは出來ないであらう。何故なら吾らは神を知ることが出來ないから心が淸まらない、心が淸まらないから神を見ることは出來ない……斯くして吾等は永遠に神を知るの機會はないであらう。併し心を淸くすると云ふことを『心を至順にする』と云ふことに解するとき吾等は神をたやすく知ることが出來るのではなからうか。『我れ戸の外にありて叩く。誰にてもあれ戸をひらくものあらば入りて偕にその者と飮み食ひせん』と。神は戸をたゝいてゐたまふのである。しかし神は我らの自由意志を尊重して强ひては入りたまはないのである。闖入はし給はないが、父は子に會ひたがつてゐ給ふのである――これがみ旨である。み旨に至順であるとき吾らは戸を開かずにはゐられないであらう。戸をひらけば神は吾らの家に入りたまふ、此の時我らは神を眼のあたりに見、神を知るのである。卽ち『心を淸くする』とは戸を開くことであつて、如何なる相對的惡の一つだも犯さないと云ふことではないのである。若し相對的惡を犯さなくなるならばそれは結果であつて原因ではないのである。吾らは唯、心の戸を開きさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

へすれば好いのである。『神よ入りたまへ』とたゞ呼べば好いのである。『南無阿彌陀佛』とたゞ呼べば好いのである。それは我らが空氣を吸入するには肺臟を膨らすだけで好いがやうにである。我らの肉體は空氣を吸うて生成する。我らのたましひは神を呼吸して成長するのである。吾らの自由意志は神の流入によつて失はれるのではないのである。われらの肉體は空氣を呼吸しながら、自然の法則に從つて徐々に成長する。(何でも徐々に成長するのが自然の法則である。)それと同じやうに吾らのたましひは神の流入によつて徐々に成長し、我らの自由意志は徐々に淨化し成長して自由意志の名にそむかない大自在境に到達するのである。倉田氏よ、貴下は近頃眠らうと欲して眠り得ないと云ふ事實より、心を支配することの可能不可能――ひいては自由意志の限度等の問題にまで思ひなやんでゐられるさうでありますが、自由意志は能作の力ではないのである。たゞそれは選擇の方向を決するのみである。吾等は自由意志の力にて目的を成就しようとしてはならない。意志はものを成就しない。それは成就さるべきものを選擇する、然るのち『これを成就せしめたまへ』と吾等は神に呼びかける。吾らが選擇したものを成就せしめたまふのは神である。神のみが能作の力であるのである『われみづからにては何事もなし得ず』と耶蘇が宣うたのは此の意味ではなからうか。意志が此の能作の力に結びつかないとき、如何にそれが無力であることよ! 入學試驗はパスしなければならぬと吾らの意志があせるとき、あせればあせる程その人の答案は間違ふのである。眠らねばならぬと意志があせるとき、その人は益々眠りがたいのである。しかも眠らねばならぬと云ふ努力を捨てようと意志があせるとき、依然としてその意志は目的を成就しない。意志は能作の力ではないのである。それは欲すると

ころを選擇する、それを成就したまふのは神である。吾らは心さへも自分で支配するのではなくして、自分の選擇した方向に神に支配して頂くのである。茲にこそ本當の安心があるのである。心さへも神に支配して頂くと云ふとき吾等の人格の尊嚴が傷けられることはないであらうか。然り、傷けられることはないのである。吾等は自己の心を此の方向に支配したまへと自己の選擇を高く揭げた、茲に自由意志は決して捨てられてゐないのである。そしてその成就は吾等の選擇した方向に神の力にてなされるのである。吾が自由意志は宇宙的力に結びついて成就の大自在力を得るのである。しかも能作の力の方向を指揮するものは吾等自身である。吾等は指揮者であり、王者である、人格の尊嚴は決して害はれてはゐないのである。若し吾らが他のものは神に成就して頂くのであるが心だけは自己で支配せねばならぬならば、吾等はあらゆる業のうち最も至難なる業を自己の上に引受けねばならぬことになるであらう。尙この點に關しては九月に警醒社から出る筈の『神と偕に生くる道』を讀んで頂きたい。これは自分の著書ではなく譯書たるに過ぎないが、心を如何に支配すべきかと云ふことについて實によく自分の見地に合致するのである。（一九二六、八、五）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

兩手

荻原井泉水

「入れ物はない兩手でうける」とは放哉の句である。物を畜ふべき器といふものすら持たない無一物の氣持、それゆえ限りなく惠まれてゐる氣持、全心の感謝を以て其をありがたく受取る氣持——多すぎて兩手からこぼれ落ちそうではないか。此放哉の氣持は貴いものだが、其につけても「兩手」といふものを考へてみたい。

子供が兩手を重ねて頂戴といふ心、兩手をついて詫入る心、兩手を擧げて歡呼する心、すべて全人的の心を表現する時には兩手になる。佛教から來てゐる合掌は、其初めは敬拜の意であり、今日には寧ろ祈願の意に多く用ひられてゐるが、兩手を合はすといふ事は、全心の眞實を以てといふ事に外ならない、私達は、平生どんな小さな事に當つても、常に兩手を以てする氣持でありたいと思ふ。當今は人間がだん〳〵利口になつて、片手で鉦を打ち片手で大鼓を打つ弘め屋もある、片手で演壇を敲いて正義を叫び片手で袖の下の金を受ける政治家もある。之は巧みに過ぎる。兩刀使ひの劍術は、いさましいやうだが、兩手を以て一刀を握つて正眼に構へた方がしつかりしてゐるではないか。人はいや〳〵に怠けながら仕事をする時に、片手は懐に入れておく、しぶ〳〵ながら承知する時に、片手をソツト出す。兎も角、片手づゝ別々の事をしてゐるやうな生活、又、片手だけで事をしてゐるやうな生

活は、斷じていゝ生活でないと思ふ。しくじつた、しまつた、といふのは、きつと片手だけで物を持つてゐた時である。どんな小さな物でも、其を兩手で受ける氣持でありたい。兩手で捧げるといふ事は、其を完全に自分の物とするといふ事である。

寒い夜の事

寒い夜の話、友人から聞いたのではあるが、其人の言葉として書く。——正月三日の夜、或ガード下に行きかゝると、自分を見掛けたように「夕刊々々」と叫上げる少女の暗い聲があつた。立ごまつて其新聞を買ひながら、正月匆々から、子供の身で稼がねばならぬとはかはいさうだなといふ、自分の柄にもない氣持が起きたので、蟇口の中で丁度指に當つた五十錢銀貨を其儘やりたくなつた。其時、正直さうな子だ、惠むと云つたらば受取るまい、といふ氣持と、右の手で惠むものを左の手に知らせるな、と聖書で敎へられてゐた氣持も、ふつと起つたので、「おい、こゝに入れるよ」と云つて、其子が錢箱にしてゐる暗い空罐の中にホイと投込むなり、足速に其處を去らうとした。その動作がヤヽ不自然だつたのだらう。

女の子はあはてたように「あゝ、もしもし、……」と云ひかける、自分の隱してした慈善が見つかつたのかと思ふと、驚いた事には「……もう一錢下さい」といふではないか。二錢の新聞を一錢でごまかした猾い奴と思はれたのだ。自分はカッと腹が立つた。然し、凡ては猜疑の眼をもたねばならぬやうな生活をもつてゐる其女の子が一層哀れに感じられた。而して、さう疑はれたとて腹を立つた自分も

駄目だと思つた。それから又考へると、先づ自分の惠むといふ氣持が單なるセンチメンタルだつた。其子に家に戻つてから不意に銀貨を發見さして喜ばしてやらうなどと思つて、ゐたのも幼いロマンチックな氣持だつた。右の手で與へたものを左の手に知らすなといふ氣持に徹するならば、其時「あゝ、そうか」と云つて、氣持好く、直にもう一錢出して渡すべきなのだ、又自分の惠みに更に一錢を加へる事は何でもない事であるのに、事實は正反對の惡い氣持になるのは淺間しいものだと思つた。云々。

私は云つた。氣持よく、といふ事程むづかしい事はない、强ひられても氣持好く、誤解されても氣持よく、といふ所まで行き得れば、人間も卒業したものである。

錢湯

錢湯といふものは好い氣持のものだ。巡査は官服を脫ぎ、車屋はハッピを脫ぎ、お醫者も坊主も、先生も生徒も、平等一如の素裸となつて、湯槽のなかに浸つてゐる。人間生活がいつも此錢湯の氣持で行けたらばさぞ好からうと思ふ。然し、此處でも、湯が熱過ぎると思ふ者がある、ぬる過ぎると思ふ者がある、一人が水をうめれば、一人は迷惑する。それでも、先づ熱いずきの强者は、ぬるいずきの弱者に許して、格別不平を云ひ立てることもなく解決する。こゝが素裸の世界の德である。又、他人にとばしりの掛かるものも平氣な風をして、浴び湯をする者がある、掛けられた方では顏をしかめてゐるが、他意のある事とは思はないから、いや、掛けられたとてこちらに損害もないから、默つて濟んでしまふ。これも素裸の世界の德である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

或夕、錢湯の中はこみあつてゐた。私はやつと一つの小桶をさがし出して來、やつと自分の腰をおろす場所を求め得たといふ氣持で、身體を洗つてゐた。と、横から一つの手がニユッと私の前に出た。そこなる小桶を取つて行かうとする――實はそうでなかつたかもしれぬが――私は反射的に、自分の小桶をおさへて、これは自分のだといふことを表明した。其と同時に、私ははつと自分に恥かしい氣した。その桶がどうして自分のものだと云ひ得られよう。其はただかりものなのだ、此「本來無一物」なる素裸の世界に於て、かりの用をする爲めに、一寸の間借りてゐる物にすぎないのだ。それをも自分の物だといふ氣が起る、而して他に奪はれまいとする。此小桶ばかりではない、考へて見ると、私達の生活に於て、何事にでも、本來自分の物でない物を、かりに自分の物としてゐながら、其を失はれまいといふ心使ひばかりしてゐる私達ではないか……。

滿足と悦びとを敎へ子の發育と上達とに置く時、身の及ばざることも、老の將に至らんとすることをも忘らるゝものであります。此境地に於ては、理想を敢て說くも憚らず、自から設ける理想に達し得ざればとて、强ひてその職を辭せねばならぬと感ずることもないと存じます。旺んなる師心は敎師安心立命の地であると思ひます。

――中桐先生「師心論」より――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

路頭にて

すゞき五ろろ

夏の陽

夏の日に
田舍道を　旅するさ、
見亘す限り
青々さした　稻田が
そよ風に　波打つ眺めは
またなく美しい。

村に入るさ
乙女達が、
むつちりした　乳房もあらわに
腰卷一つで
立働いている姿も
美しい極みだ。

夏の陽は
凡てのものを　成長させ
また赤裸にさせる、
希はくば　私も
夏の陽でありたい。

惡魔の伴奏

終日
畑仕事して
歸つてから　調べる
一管の竹、
そこに　心からの
樂みはある。

終日
書齋に　寢そべつて
かき鳴らす
マンドリン　セロ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

そこに　黒き陰影と
焦燥はつきまとう。

希はくば　私の音樂をして
朗かなる心の
悦びたらしめよ、
神の御榮えを　昧まさんとする
惡魔の舞踊の
伴奏たらしむる勿れ。

こゝろ

子供と　犬に
救はれて
今日も　一日
暮れました。

夏の日中に
燃えさかる
私の心の溶鑛爐、
默つて　靜かに
燃えている
音なく　眞赤に
燃えている。

一米粒の重きこと須彌山の如し。
若し理に通ぜざれば皮毛戴角せん。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

スラム・ポストのいのり

松下吉衛

×月××日　木曜

早起、南縁の戸お排して、長男(中學二年)次男(尋常六年)と共に、藤田式息心調和道お實習する。この冬、臺灣に遊んで弟の奉仕している H商店の人々の調和道實習成績お親しく見せてもろうて以來、學生時代からずうつとやつて來た岡田式靜座法お藤田式に改宗して、子供達にもやるようすゝめたのである。ひようきんものの次男わ、此頃、一所に湯にはいりなどすると、下腹おなでゝ、こんなに大きくなつた、いまあに達磨さんのようになるんだなどゝいつてうれしがつている。實習お始めてまだ三四ヶ月だが、子供達の心身に可なりよいあらわれが見えている。

曉風おあびての端坐、恭禮、調息、反省と感謝、朝食、……それから一日のいとなみにかゝるとゆう順。こうした朝の行事おすべての家庭におし及ぼしたい。一家の和合がきつともちきたされ、不良少年少女などの出來るおそれがなくなろうと思う。

父上の咽喉癌手術の豫後が、どうもよくなくつて、此度わ外部に腫れ出したらしいとゆう。今レントゲン療法お二週間に一度ずつ受けてい

られるが、電氣おかけることも體によいとゆうので、母上が朝夕手傳つて施術していられる。もう六十三の老齢であるが、家事一切おやつてくださつているので、私わ社會えの奉仕に專らなるお得ているわけなのだが、このまゝ弱くなられでもすると、私にわ最も苦手な世間との經濟的接觸の仕事が全部私の肩にふりかゝつてくることゝなる。

經濟的接觸でわ今までにも私わずいぶんしくじつてきている。見とおしがきかぬとゆうのか、人情まけしてしまうのか、まんまとしてやられてしまつて、後で大へん惱まされ自他ともに傷つくとゆう結果になつて、精神的にも物質的にもみじめお見るのである。世間に獨りお守ろうとする善人が、此頃殊に多くなつてきたようであるが、理においてわ贊同されないけれど、その人にしてわ全くやりきれないんだろうから、同情わ充分できる。善人の弱さに羊の裝で狼が襲いかゝつてくるのだ。一燈園の生活にふれなかつたとすれば、私などとうに獨善主義者になつている外なかつたろうと思われる。人間つてあまりにも不都合に造られたものだと、經濟にふれるとわ、今更でわないがつくずく考えさせられる。

午前九時廿分T驛發の汽車で上京。車中例によつて執筆、××××えの厚稿ようやく纒まる。O驛にて下車、電車でAの細民地區に行き家庭訪問おする。此頃Dさんのところが、自然、私の此邊の足だまり——スラムポストになつているので、まずそこお訪れる。Dさんわ青物賣りに出て留守だつた。おかみさんがわざ〳〵精進揚を買つてきておひるおたべるようにいつてきかないので、おふるまいにあづかる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『顔色が大そうよくなつたようですね。』部屋の片隅にねんねこばんてんにくるまつておかれてある赤ん坊の寝顔おのぞいて私がこうゆうと、おかみさんわうれしそうに、

『えゝ、おかげさまで。もう大丈夫です。』

『便通の具合わどうですか。』

『まだすつかりとゆうわけにわまいりませんが、度數もへりましたし色がそんなに青くなくなりました。ひどい時にくらべたらなおつたも同様でございます。』

先々月私が初めてこの地區にいのることになつた時、路お通ると、しわがれた聲で泣きじやくつている產れて間もない乳兒お、夫婦してどう扱つたらいゝか始末にこまつておろ／＼しているのが見あたつたので、ふと立寄らせてもらつたのが、このDさんの家であつたのだ。乳が殆んど出ないので、ミルクで育てゝいるとゆうのであるが、薄め方も分量も容器の消毒法も××のお醫者さんに敎えてもらつたそうであるのに、よくわかつていなかつたらしいので、私が自身にやつて見せ、コンデンストミルクおよして牛乳にかえることにしたのである。それから、赤子の容態が日增しに目に見えてよくなつたので、それお大へん德として過分の扱えお私にしてくれ、六疊に三疊と臺所とゆう住居お、三疊の方わ人に間貸しているとゆう餘裕のないところだのに、私に何日でも來て自由につかうようにいつてくれるのである。

『そこお出て四つ角お左え曲つて行くと、左側に駄菓子屋があるでしよう。そのこつち隣りのおじいさんがこの間まいりまして、あなたさんがお見えになつたら是非知らせてくれるようにいつておいでゝした。』

『そうでしたか。』

『何か急な御相談でもあるらしく大へん心配そうな御様子でした。』

おひるおいたゞくと、すぐ私わそのおじいさんのところえ出かけていつた。おじいさんの相談とゆうのわこうである。——

おじいさん一家わ、伜夫婦と三人の孫と合せて六人のくらしである。伜わ今年三十幾つの働きざかり、日傭勞働に出て仕事さえあれば日に二圓以上のかせぎわしてくるのだが、春からずうつとあまりアブレるものだから、誘う人があつたのお幸い、一ト月ほど前に樺太え出稼に行つた。それつきり、あちらえ着いたとも何とも音沙汰がなく、一番大きい孫が復興局の給仕に出て月々もらつてくる手當の十圓と一家こぞつてする手内職でかせぐ二十圓たらずのものとで、とにかくほそ〲やつてわいるけれど、とてもたえられたものでなく、伜の居所もさがしようわなし、困つてしまつたとゆうのである。

此頃こうした種類の相談——夫におきざりにされた妻と子、妻に逃げられた夫と子の始末——お、そちこちでずいぶん頻繁にもちかけられるが、原因の八九わ直接にわ經濟のことにあるらしい。社會の經濟組織が革められない限り、根本的にこれおどうするとゆうわけにもいくまいが、せめて子供のことだけわ、この渦卷の中から安全地帶に脱れさせたい。兒童保護法が一日も早く制定されるよう祈らずにいられない。

おじいさん一家に對してわ、私の微力で急かに何ともしようがなく、まあ當座のことゝして、家賃のあまり出ない母子ホームにでもうつゝてもらう外ないと思うが、『×××』わ今ぎつちりつまつているから、四谷の×××か本所の××××××に話してあげよう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

つゞいて家庭訪問おしてまわる。Hさんのところの今年學校にあがつたばかりの男の子が、その姉や兄とちがつて、極端に成績がわるく、受持の先生も低能兒じやないかといつて心配してこられたとゆう。ポカンとしている顔付から見て、或わ鼻か耳か咽喉あたりにでも何か疾患があるのでわないかと思われる。O先生えの紹介狀お書いてあげて、診察してもらうことにする。

Eさん方でわ、先達お世話してあげた手袋かがりの內職が、可なり精出してやつても、一日ようやく二十何錢にしかならぬといつてくどかれた。お氣の毒だが致し方がない。搾汗制度（スウエッティングシステム）がかたく根おはつているのだから、少數の人がいくら躍起になろうと、一朝一夕にこれおどうしようもあるまい。口に革命お叫ぶことわ寧ろ容易であるけれど、ために米相場が十錢とちがいわすまい。運動としてわ協營組合（コオポレーシヨン）お起すのが、今の場合、最も適切と信ぜられる。たゞその方まで私等の手がまだ延びていないのお遺憾とする。志お同じうする人々と共に、最初わごんな小規模でもよい、一日も早くこの運動お具體化したいと思う。

みそゝぎ教のおがみおしているKじいさんが引きつゞきよくないときいてお見舞して體おさすつてあげる。年が年だし、素人の目にも今日あたりの容態でわ、あまり長くわもつまいと思われる。おばあさんが、乏しいなかお看護につとめているが、養子の少年が使い步きもよくしてくれず、じやけんでいけないといつてこぼされる。

『先生、わつしらのゆうことわ、ちつともきいてくれないんです。それでよいもんかどうか、先生、しかつてやつてください。』と、おばあさんのにらむ少年お見ると、あどけない顏に不安

そうにきよとんとした目おむいて私の方お見つめて立つている。まだ十二三の遊びたいざかりの年頃、小言おゆうにも言いようもない。たゞ、おじいさんがあんなにわるいんだから御用おたしてくれるように頼む外なく、『來週くる時に何か面白い本おもつて來てあげよう。』といつたら、少年わわずかに笑顔おつくつたようだつた。

角の居酒屋のわきからDさんの前お通つて西え曲つたところまで下水掃除おする。家々のおかみさんや何か手傳つてくれたので割に早くおえた。下水掃除つておもしろい、自分の家の前だけやつても上と下がたまつていてわ流れない、みんなして齊一にしなければだめである。それで、誰か人の家の分までやるつもりでやり初めないと誰もやらないが、誰かゞそうやり初めると、みんなごぶのつかえているのにわ困つているのだから、すぐ喜んで參加するのだ。

夜、木賃宿××屋の一室で子供會お開く。初め讀力と算術お見てやつて、しまいにお話おする。今夜わ十四名あつまつた。不就學兒童が三名と、あとわ尋常三年から六年までの子供である。學校が二部教授三部教授になつていたり、家でも子供のことなどかまつてやる餘裕のあるものもいなければ、子供自身にも家事の手傳で本おあけるひまもないとゆう有樣なので、教授が實に徹底していない。これでわ六ケ年の義務教育お終つても、今の世に獨り歩きするのに不自由で仕方あるまい。これわまあ我慢するとしても、訓練にいたつてわ、殆ど放任の姿であるといつてよい。こうした地區——生活環境おこのまゝにしておいたのでわ、學校の先生にしても手のつけようがないだろうし、反社會的性情

の者があとから〳〵續出するわけだ。東京市一圓に細民集團地區のひどいのわ、こゝおいれて七ヶ所ほどある。これらお改善するにわ、相當多額な費用お要することであるが、根本策だから、國家事業として一日も早く是非着手すべきだと思う。

××屋の好意でとめてもらう。割にのみがいないので安眠がとれた。床中、先頃おくられた友人K氏著わすところの『經濟學概論』お讀む。

○本號表紙題字　は京都東福寺の選佛場(禪堂)に掲げたる聯『寶鑑當臺昭々五百五十年光彩。證佛及弟堂々二千二百個威儀』のうちよりいたゞきました。丁度今より百年前鎌倉圓覺の眞淨禪師の筆にかゝるものださうです。

數學、地理、歷史、國語、科學、それらを如何に巧に敎へることが出來ても、魂にふれて火を發し、心にふれて光と散るまことの倫理、形式道德論を離れた人間本來の約束によつて堅く守らねばならぬよろこびの道德愛の學問を、巧さをもつてするのではなく、眞實心の底から迫つてくる力、その力で子供に話すことの出來る先生、それを希望します。

——全人、第一卷第一號より——

神の國は近い

（聖書ルカ傳第二十一章三十一章の說教）

マイステル　エツクハルト

「皆樣方御覽なさい。神の國は間近くあるのです。」と愛する私らの主は申されます。まことに神の國は私等の內にあるのです。「私等の安寧さは私らが信じてゐます以上に間近いのです、」と聖パウロも申されます。それ故に皆さまは神の國がどんなに間近くあるかを知らなければなりません。私等は此要求の意味を注意深く闡明しなければなりません。私が假に王樣であつたと致しましても、若し王樣である事を知らなかつたなら、私は王樣である事は出來ません。然し私が私自身の王樣である事の確かな證據を持ち、そこで全ての人々が此に同意し、そして私が復全ての人々が此事を信じてゐる事を確かに知りますならば、その時こそ私は王樣であり、且王樣としての全ての富は私のものであります。けれどもこの三つの內の一つでも缺けますと、私はたちまち王樣ではありません。正しくそれと同樣に、私等の祝福は、あの最高の善、卽ち神自らを知り且認めると云ふ事に懸つてあるのです。私は神を眞底からお受けする私の精神に於きまして一つの力を持つております。私には神より私の身に間近いものは何一つないと云ふ事が、此の身の生きてる事と同樣に確かなのです。神は私自らよりも更に私

に間近いのです。私の存在は只、神が私の身に間近く且現に居給ふと云ふ事に懸つてあるのです。まことに神は一つの石一つの木片にも亦間近く居給ふのです。只それらの物はその事實を知らぬ丈です。若し木が神をしり、又神が如何に自らに間近いかを知りましたならば、その木は最高の天使が此事を知りましたと同様の祝福を受けるでありませう。其故に神を知り且神の間近いことを知る人間は木片よりも幸福なのです。私等は此事を知る事が多ければ多い程より多く、少なければ少い程より少く祝福されてゐるのです。私等は神がその内に居給ひ、又間近く居給ひ、又私等が神を所持すると云ふので祝福されてゐるのではありませぬ。只神を認識する事によつて祝福されてゐるのです。卽ち如何に神は私等に間近く居給ふか、そして如何に神が私等に惠深く且現に居給ふかを認識する事によつて祝福されてゐるのです。

「私等は神の國の間近くある事を知らねばなりませぬ。」私が神の國に就いて思ひ廻らします時、その測り知り難い事の爲に屢々沈默しなければならないやうになる事があります。それと申しますのも神の國は少さなものではないからです。私等が神のお創りなさつた世界の全てを思ひましたとしても、それは神の國ではありませぬ。如何なる精神(こゝろ)に於て常に「神の國」がいや增し、又明になるかは最早人に說く事も敎へる事も望めないのです。神の國からこそ精神(こゝろ)は充分に敎へられ且は永遠の生命を保證されるのです。さればこそ神の國の間近きを知る者は、ヤコブと共に「此の處に神は在します、しかも私は此を知りませぬ」と云ひ得るのです。

萬物に於きましても神は私等に於けると等しく間近く居給ふのです。「神はその網絡を萬物に擴げ給

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ふ故に、私等は只神を認識しやうと意志しさへすれば萬物のすべてに神を見、神を識る事ができます、」と賢者も申されてゐます。「萬物の内に自らを認識する者のみが神を正しく識る者です。」と或師も申されてゐます。神に恐懼奉仕するは宜しい。神に愛から奉仕するのは更に良ろしい。けれども愛と恐懼を結ぶ道を知る者こそ最上であります。休息(やすらひ)と平穏の生涯が神に到る事は結構です。痛苦に滿ちた生涯を耐え忍んで生きるのはより良ろしい。けれ共痛苦に滿ちた生涯の内にやすらひを持つこそ最上であります。野を分けて其の祈を捧げ、神を認める人もあります。けれども其人が寂しい處に逃れたが故により多く神を認めたのでありましたならば、其祈は彼の不完全さから發したものでして、神の御爲に發したものではありませぬ。何となれば神は萬物に於て、又萬の處に於て平等に居給ひ、且それが神に於ての事であります限りは常に等しい仕方に於て顯れやうとし給ふからです。そして神を何處ででも同じ仕方で見出す人だけが、まことに神を見出したのです。

「私の眼は天を認めるのに、私の足は何故天を見ないのであらうか、」と聖ベルナルドは申されました。其故は私等の眼は私等の足よりもより天に似てゐるからです。私等の精神が神を認識せんとするならば、その精神は天の如くあらねばなりませぬ。それ故精神をしてその内に神を認めしめ、且神が如何に間近く居給ふかを洞見させるやうにするものは何でありませうか。更に復、天は何ら他からの影響を受けないのであります。天をそれ自らの座から下す何物もなく、痛苦も困惑も天の内には入り得ないのであります。其故に精神(こころ)が天を認識せんとするならば、天の内に望や怖れ、喜や悲、愛や惱を、又天がその外に取出してしまふやうな何物をも押し込ませぬ爲に精神も亦引きしめられ確め

られねばなりませぬ。天と地の間は何處に於ても其距離を同じくしてゐます。其故に精神は、一のものに他のものよりもより近づいてあるやうな事がないやうに、全ての地上的なものから遠ざかるべきであります。精神は愛と惱に於て、富と窮乏に於て等しくあらねばなりませぬ。如何なる事でありませうとも、精神はそれに對して全く死んで、捨離して、又高く矜持してゐなくてはなりませぬ。天は純粹でありまして又汚れない透徹からなり、時間も空間も動かし得ないのであります。すべて有形的なものはその内に座を持たず、且それは時間の内にも包含せられる事はありませぬ。その運行の起るや信じ難い程速く、その經過は自ら時をもたず、却つてその經過からこそ時が來るのであります。時間と空間は常に支柱に過ぎませぬ。けれ共神は唯一であります。故に一般に精神が神を認識せんとするならば、精神は時間を超へ空間を超へてそれを認識しなければなりませぬ。其故は神にはかの多種多樣な物の如く此と云ひ彼と云ふ事がないからであります。精は唯一であります。精神が神を見んとするならば、同時に時間に屬する如何なるものにもその眼をやつてはなりませぬ。其故は時間や空間や又は他の同樣の形象がその意識を滿す限りは、精神は神を認める事は出來ぬからです。眼が色を認めんとしますならば、眼自らは先づ全ての色を脱却しなければなりませぬ。精神が神を見んとしますならば、精神は無と共に何一つ所持する事を容されませぬ。神を觀る者は又全て創られたものは無である事を認めるのです。人が一の創られたものを他のものに較べます時に、そのものが美しくみえ且何物かでありましても、それを神に較べました時にはそれは無であります。

私は更に申します。精神が神を見んとしますならば、精神は又身自らを忘れ、身自らを失はなければ

ばなりませぬ。其故は精神が身自らを見且知る限りは、精神は神を観ないからです。けれ共精神が神の爲に其の自我を棄てそして萬物を捨離しますならば、その時精神は再び自らを神の裏に見出すのです。精神が神を認識します時は、卽ち精神が充ち足つた仕方に於て神の内に身自らと將又精神が自らはじめを立てた處の萬物を認識する時です。まことに私がその最高の善を、永遠の善を認識せんとしますならば、私はそれをそれが只支柱であるやうな處に於てではなくて、それがそれ自ら在る處、卽ち神に於て認識しなければなりませぬ。神に於てのみ全い神的な實在があるのです。一人の人間は人間全てではないのですから一個の人間のうちに全い人性はありませぬ。けれ共神におきましては精神は又全人性を認め、萬物を最高の意味に於て識るのであります。其故は精神がそこに於てそれらのものをその本性に隨つて認識するからです。

美しく彩色された家の内に自ら住む者は、這入つてくる事もなく、又それに就いて多く語らうと欲しない者よりはたしかにそれに就いてより多くを知つてゐます。それ故に其の如く私自らの生命或は神の生命に就いて確く信じて疑はないのであります。卽ち精神が神を認めんとしますならば、時間を超へ空間を超へてでなければなりませぬ。只このやうな精神のみが神を識り、そして神の國の如何に間近いかを知るのでありまして、それをその全ての富を持ち給ふ神御自らと申すのであります。學校の先生は、神を認めるために精神をどうすればよいかと云ふ事を色々とお考へになります、しかし神が人間に多くの事を求め給ふのは神の峻嚴さから來るのではありませんで、神の大きな慈しみから參るのであります。其故は神は精神が自らを擴めて、それが正しく多くをお受けし、そこで神が精神

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

に多くを與へ給へるやうにと望まれるからです。

此事は難しく言はれますからとて、又最初全ての物に對して別れてしまひ又死んでしまふと云ふ事が難かしいからとて、何人も此處に到る事を難しいと思つてはなりません。けれども私等が一旦は入りましたならば如何なる生活も此以上安易な愉快な又飛びつく程喜しい生活はありませぬ。何故ならば、神は常に人間のもとにましまして、私等が只隨はうと欲した丈で私等を神に導き給ふ事を私等に示し給ふ程に熱心でゐますからです。人間が神を認めるやうにと神が御導きなさらうとする程にそれ程強く神に到らん事を求める人間は一人もないのです。神は如何なる時にも用意をなさつてゐますが、私等は甚だ不用意なのです。神は私等の間近に居給ふのですが、私等は神から遠ざかつてゐます。神は内に居給ひ私等は外に居ります。神は私等を家とし給ひますが、私等は知らぬ顔でゐるのです。

「神は義しい人を廣い處に又大きな處に到らせんが爲に、狹い道を通じて開いた道にお導きになります、」と或豫言者は申してゐます。その意は心靈の眞の自由さに於てそれが神と共に聖靈となつたことであります。私等が神に全て從ふ事、卽ち神が御自らの内に私等を導き給ふ事——この事のためにこそ神は私等を助け給ふのであります。合掌。（一九二六、七、二六、××生譯。）

（Herman Büttner の Meister Eckeharts Schriften und Predigten に據る）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

天香詰師の西遊を送る

中桐確太郎

天香詰師は布哇及び北米加州各地からの懇請に應じて、本月七日横濱發の太洋丸によりて西遊の途に上らるゝことになりました。私は楠妣庵夏期大學との約ありて横濱港頭に御見送りすることできぬことになつたので、本月二日、長濱に會して、こゝにて御別れすることゝいたしました。早朝長濱に着し、共に八幡社・愛染堂に詣うで、鍋德さんに至りて朝飯をいたゞき、何くれの御話をいたしました。

天香さん曰く、隨緣の此行、何を使命といたすべきでありませうか。私答へて申すやう。光十字運動とでも申すべきを祈り据ゑられんことも、その主もなる一つでありますまいか、と。

蓋し現今は國家本位の時代であります。もし此の時代精神の奔放するにまかせて、之を利導することを怠る時は、世界の平和は勿論、國家それ自身の存立の基礎も崩潰するに至るでありませう。

私の信ずる所によりますれば、人間はその至心の切望——卽ち愛の基礎の上に、その自由を享有せ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

んとする要求——を滿足せしむべく、精神生活の程度に應じて種々の社會生活を營んでをります。家庭、國家、若くは其他の集團生活は卽ち是でありますが、現今の如き精神生活の發達程度に於て、比較的確實に此の人間至心の要求を滿足せしめくれるのは卽ち國家であります。現代は、すべての團結興味が之を中心として集注してをります。卽ち國家本位の時代といはるゝ所以でありませう。

そして此の國家生活の基礎となつてをる所の愛は、現今の精神生活程度に於ては、人々の我執によりて局限せられたるものではありますが、その本質は、一切他と自分とは本來一體であるといふ潛在的靈覺を根據としてをりますので、此の靈覺に連り、これに培はれて始めて眞の生命に活くることを得るのであると思ひます。然るにさなきだに我執によりて局限せられてをる處の國家的愛が、更に我執によりてます〳〵偏狹化せらるゝならば、その根本の生命は萎微沮喪、遂に枯死するに至るは當然のことであります。恰かも挿花に用ゐらるゝ樹木の如く、生命力の惰性により、または少分の液體に養はれ、一時の盛を維持することを得るとしても、到底永く續くものではありません。偏狹我執の愛國的精神によりてのみ維持せられたる國家がその活力元氣を失ひて衰亡せるに至れる例は世界の歷史に、その數少なからぬのであります。

然しながら國家本位の時代精神は、その歷史上の事情と地理上の關係とによりて相衝突し、そこに戰爭の慘禍をさへ惹起すことしば〳〵であります。これは精神生活の程度今日の如き狀態に於ては餘

儀なきことでありませう。此の餘儀なき勢の赴く所、正當なる愛國的精神も自から偏執矯激に傾き、神聖なるべき武も濆され、幾億の生民、修羅の巷に塗炭の苦を受けねばならぬことにも立ちいたるでありませう。此の愛國的精神惡化の罪を負ひ、人類愛の生命に活きつゝ、以て國家的精神の正導に從はんとしてあらはれたるものは、かの赤十字運動でありませう。

即ち同國人が一方に於て奮戰健闘、突貫殺戮を敢行しつゝある間に、他方に於ては、設備を整へ、隊を組み、危險を冐して深く戰地に入り、敵と味方とを論ぜず、倒れたるを扶け、傷つけるを救ひ、その血を洗ひ、その創を包み、いたはり慰め、以て少しにてもその苦痛を輕からしめんことをつとめつつあるが如き、いづれも人類愛の實行を以て惡化せる愛國的精神を淨化し、高化し、若くは賠償し、補完せんとする試みに外ならぬと見るべきでありませう。

以上は人間の凶禍といはるゝ戰爭の場合に於てゞあります。但し戰爭は平衡の破裂に外ならず、而して此平衡はたゞ武裝によりて維持せられつゝある平和たるに過ぎません。國家本位的精神の强盛なる限り、有形無形の鬪爭は無限であります。此の如く生民は國家的戰爭によりて、縱に分裂せしめられつゝあるのみならず、また經濟的鬪爭によりて橫に切り離されて、紛雜を極めたる無限の惱みに悶えつゝあるのであります。國家的戰亂に赤十字運動の必要があるならば、かゝる紛糾錯雜を極めたる混亂期に應ずべき別個の運動の必要あることは申すまでもありますまい。私は此の機會に於て、殊に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

之を光十字運動とでも名づけたいと思ひます。

今新に光十字運動と申しても、一燈園生活者の祈願實現の運動に外ありません。卽ち此世に於ける人類愛、その力なほ微弱に、愛國的精神やゝもすれば惡化せんとする責は、畢竟自分等の負はねばならぬものとして之を懺悔し、その罪を謝せんが爲に、何よりもまづ、自分の我執の根本を拔き去ることによりて、此世に愛と自由との天國淨土を開顯するの一資たらんことを期し、機に應じ緣に隨ひ、如何なる職業に從事し、如何なる事務に當るにしても、つねに懺悔奉仕によれる托鉢の行願を徹底的に成就せんことを祈ることに外なりませんが、此たび天香詣師の西遊を機として、更に在外同志、及び米國その他各國の共鳴者と相呼應して此の祈願を普及實施せしめんことに應分の力を盡さんとすることを新に祈り添へ、以て光十字運動の基礎となしたいと思ふのであります。

但し『燈をともして升の下におくものなし』といふこともありますが、また一燈園の新生活は地下水行の俗諺成就に存するものなることも、お互に注意せねばならぬことであると思ひます。これ殊に『祈り据ゑ』と申したいと思ふ所以でもあります。

私は大略上述の如き趣旨を(本誌第三十二號所揭の拙稿參照)、極めて簡單に申述べました。天香さん莞爾として之をうべなはれました。かくて其午後二時半、米原に於て袂を分つたのであります。私は楠妣庵にての奉仕を了はりてこの九日燈影塾を訪ね、『海上無事』の電報に接することを得て幸先を祝しあひました。なほこゝに皆樣と共に一路の平安と前途の光明とを祈りたいと思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

黎明のさゝやき

西田天香著　代價30錢

近代文化と一燈園生活

,,　,,

一燈園生活問答

松下吉衛著　代價15錢

時代苦を苦しむ

,,　代價20錢

クリスト教社會主義史

,,　代價32錢

社會問題と宗教

中桐確太郎著　近刊

購讀申込所

回光社

京都市烏丸頭下總町五

振替 大阪59839・東京57671

● 一燈園經要　御希望の方わ實費送料22錢(2錢切手)
下記え――東京・本所・林町二ノ七八 同勞會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

◀ 銷夏避暑の好讀物 ▶

中外日報 三十年

八想録

八千號 記念出版

體裁	紙	○	物	道	女	家	人	血	價格
各冊四六版八十頁以上 上質紙優美高雅裝幀	石川日出鶴丸	西田天香	近重眞澄	荻原井泉水	高島米峰	梅原眞隆	曉烏敏	足利浄圓	毎一冊金五十錢・稅四錢 全八冊金四圓・稅十六錢

手輕な肩の凝らぬ讀物として

本書は想界唯一の宗教新聞であり、敎界唯一の思想新聞であるわが中外日報が、創刊三十年八千號の記念であります。記念出版といふことも餘りに月並的で鼻につくやうでありますが、本書の知き執筆の諸氏は、何れも現代の想界に、敎界に、はた學界に各獨自の天地を占有される一人者たるは言を要しません。しかも其内容に至つては、期せずして一致した奇拔なる題號と共に、奇聞、傳說、趣味、好事、さては肩の凝らぬ考證もの、思想批判、社會評論より、すつきりしたエロチックな話など、燦爛たる想華は天下一品の偉觀であります。

今や堅くるしい論説や研究には胸がつかへ、それとて玄人筋の文藝ものにも飽き〳〵してゐる時、本書の如き淡々として盡きざる興趣の裡に、スラスラと讀破し得て、しかも何物かを把握せしめねばおかぬものこそ、萬人向きの好讀物として推奬するものであります。

綠陰に、水邊に、旅窓に、隨時隨處に繙くべく、津々たる凉味に苦熱を忘れ得るであらう。

記念特價

本書は目下出版中にて八月中に全部完成の豫定でありますが、三十年八千號を記念する意味に於て、この際全部取揃前金申込に限り、全八冊にて金參圓八拾錢とし送料不要と致します。何卒陸續御申込みを切望致します。

發兌 中外日報社

發賣所 京都市東山 中外日報社内

中外出版株式會社

振替口座大阪六四一六七番